

911.3

7

鳴鶴のうらみの西美乃命を
帰る居たりし時を思ふに
越前守のちかきおの樂屋と
おのちかきおの樂屋と
筑前守のちかきおの樂屋と
筑前守のちかきおの樂屋と
筑前守のちかきおの樂屋と
筑前守のちかきおの樂屋と



西曆一千九百零九年
五月廿一日

國華公司

總經理

本公司經理各項
洋貨及各項
雜貨等件
如有欲購者請
向本公司經理
洽商可也

本公司經理各項
洋貨及各項
雜貨等件
如有欲購者請
向本公司經理
洽商可也

新産より始りて 西英産種

信じては未だ南に時あり難

之能く河を其に紅雲 鳥器

信じて未だ南に時あり難 袋帳

羽織を其に紅雲 太甫

如きは未だ南に時あり難 文石

書は未だ南に時あり難 晴画

彩るれぬき花の中より 佳雪

中五の縁記を其に紅雲 山石

臨むと四人の馬を富の札 云止

之を其に紅雲 古友

唐中八人の馬を富の札 秋鳥

信じて未だ南に時あり難 杉野

手紙の如き花の中より 白眉

手紙の如き花の中より 柳芽

新葉の姿を春も嘆く

角洗

とらふを 野を 降を

悟棠

ほりしき 花巻もろく

忍山

おは 伝を

早止

と 詠を 詠を 詠を

八束

新葉の 姿を 春も 嘆く

徳海

後 詠の 詠を 詠を

竹石

人 詠を 詠を 詠を

老安

た 詠の 詠を 詠を

桑圃

春 詠の 詠を 詠を

春耕

桂 詠の 詠を 詠を

桑里

春 詠の 詠を 詠を

春曉

た 詠の 詠を 詠を

浄心

船 詠の 詠を 詠を

乙文

た 詠の 詠を 詠を

桑也

同 詠の 詠を 詠を

適雄

阿ふうとらふ南ふのゆゆ物傳

大珠

ふりた旅のゆゆの苦ふる

月村

あふふのゆゆのゆゆのゆゆ

様丸

こらふゆゆゆゆゆゆゆゆ

青桂

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

桑五

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

柳年

あふふゆゆゆゆゆゆゆゆ

芥舎

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

西美

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

今

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

員

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

今

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

員

あまのそ朝の越ゆる物ほし

つらさるる物ほしつらさるる

あまのそ安ん座さるれ玉は楽

終るつらさるるつらさるる

とつらさるるつらさるるつらさるる

終るつらさるるつらさるる

つらさるるつらさるるつらさるる

つらさるるつらさるるつらさるる

全

全

全

全

全

全

全

全

借もの仕筋の船も動かし

つらさるるつらさるるつらさるる

つらさるるつらさるるつらさるる

つらさるるつらさるるつらさるる

つらさるるつらさるるつらさるる

つらさるるつらさるるつらさるる

つらさるるつらさるるつらさるる

つらさるるつらさるるつらさるる

全

全

全

全

全

全

全

全

吾も亦しつゝ通ふはたの事
も亦しつゝ通ふはたの事
亦しつゝ通ふはたの事
亦しつゝ通ふはたの事
亦しつゝ通ふはたの事
亦しつゝ通ふはたの事
亦しつゝ通ふはたの事
亦しつゝ通ふはたの事
亦しつゝ通ふはたの事
亦しつゝ通ふはたの事

頁 全 頁 全 頁 全 頁 全 頁 全 頁

女房も心新慶と新慶と結託
とつてきつておきつておきつて
おきつておきつておきつて
おきつておきつておきつて
おきつておきつておきつて
おきつておきつておきつて
おきつておきつておきつて
おきつておきつておきつて
おきつておきつておきつて
おきつておきつておきつて

頁 全 頁 全 頁 全 頁 全 頁

物々々々々々々々々

昔々々々々々々々々

在系

竹哉

本枯しお餅こくく雨雨結結

精公

而くは風美く也也安安茶茶

侍中

河山

たらしきりき安安如如女女枝枝心心

加賀

玄然

うけと君君車車井井くく心心のの身身向向

在石

十湖

遙遙ねねりりくくぬぬくく心心也也神神皇皇厚厚

在

霜村

活活くく心心如如空空心心のの心心のの極極

伊勢

果樹

中中のの心心のの心心のの心心のの心心

在系

新舟

如如くく心心のの心心のの心心のの心心

後攻

苦海

心心のの心心のの心心のの心心のの心心

作原

梅子

安安くく心心のの心心のの心心のの心心

在系

菊乃

心心のの心心のの心心のの心心のの心心

作原

耕子

心心のの心心のの心心のの心心のの心心

在系

云然

たらしきりき安安如如女女枝枝心心

在石

梅翁

春の如くあはれし時をたのむなり あはれ 比川

春の如くあはれし時をたのむなり 西京 梅雪

春の如くあはれし時をたのむなり 三松 春色

春の如くあはれし時をたのむなり 梁月 暮史

春の如くあはれし時をたのむなり 梅山

春の如くあはれし時をたのむなり 能中 春朴

春の如くあはれし時をたのむなり 石波 雪江

春の如くあはれし時をたのむなり 玉成後 木甫

春の如くあはれし時をたのむなり 長月 牡丹

春の如くあはれし時をたのむなり 晚香

春の如くあはれし時をたのむなり 父起

春の如くあはれし時をたのむなり 東京 天籟

春の如くあはれし時をたのむなり 梁月 芳村

春の如くあはれし時をたのむなり 三松 映梅

春の如くあはれし時をたのむなり 青山

春の如くあはれし時をたのむなり 英存

杖の何れもあつてはりやまは原、
葦阿

杖をゆく趣の何れもはるる、
葦阿

移るも時のつれや備もた、
陽春

月の輪のつれも経るおぼろ、
報後 琴麿

神代よりありはるるおぼろ、
傍後 柳哉

おぼろのつれも経るおぼろ、
傍後 月部

おぼろのつれも経るおぼろ、
新五 加らぬ

つれも経るおぼろ、
傍後 蘇重

つれも経るおぼろ、
久吉 祖康

つれも経るおぼろ、
傍後 系仙

つれも経るおぼろ、
系 旭在

つれも経るおぼろ、
梅歌

つれも経るおぼろ、
傍後 照雪

つれも経るおぼろ、
如外

つれも経るおぼろ、
卜家

つれも経るおぼろ、
傍後

杖の何れもあつてはりやまは原、
蓮阿

枯さしく趣の何れも原をいれ、
葉露

種も時々のいれや備もれ、
陽春

月の輪のいれも後におれ
琴磨

神代つりりいれも世傳の空
柳哉

おれもいれも時をいれ
月神

いれもいれもいれもいれ
初め

いれもいれもいれもいれ
蘇重

いれもいれもいれもいれ
祖康

いれもいれもいれもいれ
赤仙

いれもいれもいれもいれ
旭在

いれもいれもいれもいれ
梅歌

いれもいれもいれもいれ
明堂

いれもいれもいれもいれ
如外

いれもいれもいれもいれ
卜宗

いれもいれもいれもいれ
柳後

Handwritten cursive script, likely the start of a character or word.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

Handwritten cursive script.

柳壺

良

巧

立

音

高

野

子

流

来

通

物

之

旭

乙

市

おれをこゝろにゆゑの修業の
おれ

まことの舞の舞の五季の
ま

陽の光の光の玉の光の光の
光

清くくくくくくくくくくくくく
清

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あ

おれ

ま

光

清

あ

あ

あ

あ

山石

草花

花鳥

月夜

草庵

一柳

乙女

唯風

籬山

相重

宇崔

逸外

岩橋

園集

葉古

志々 龍 又 思 証

皓 月

知 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

角 洗

落 葉 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

悟 东

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

古 友

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

秋 色

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

青 蛙

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

竹 子

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

菜 豆

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

花 菱 女

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

柳 芽

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

兩 招

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

菓 水

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

八 菜

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

之 止

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

晴 函

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

松 竹

あまのつばきあけくさのつばきを飛

文石

あまのつばきあけくさのつばきを

春耕

あまのつばきあけくさのつばきを

春耕

あまのつばきあけくさのつばきを

春圃

あまのつばきあけくさのつばきを

春圃

あまのつばきあけくさのつばきを

水海

あまのつばきあけくさのつばきを

佳州

あまのつばきあけくさのつばきを

太珠

あまのつばきあけくさのつばきを

文石

あまのつばきあけくさのつばきを

文石

あまのつばきあけくさのつばきを

文石

あまのつばきあけくさのつばきを

文石

あまのつばきあけくさのつばきを

文石

あまのつばきあけくさのつばきを

文石

あまのつばきあけくさのつばきを

文石

あまのつばきあけくさのつばきを

文石

つらねも 枝もを 花もを 太甫

道ゆめいん 山つらね 枝もを 佳聖

ゆをりま 山つらね 山つらね 早山

竹 枝もを 山つらね 山つらね 自省

枝もを 山つらね 山つらね 愚山

まがまが 山つらね 山つらね 兼人 葉五

山つらね 山つらね 山つらね 山つらね

山つらね 山つらね 山つらね 飯後 香葉

山つらね 山つらね 山つらね 山つらね 山つらね

山つらね 山つらね 山つらね 山つらね 新月

山つらね 山つらね 山つらね 山つらね 桑月

山つらね 山つらね 山つらね 山つらね 二海

山つらね 山つらね 山つらね 山つらね 涼葉

山つらね 山つらね 山つらね 山つらね 太甫

竹のついでにさう風吹く松屋心 まよ 松屋

五とをくすや中や秋の影、 然る

白垣りうらや君の竹の影、 竹丈

空をもしやあつらのちかむた、 玉成

明をもししらけりて深おふ、 水牛

香をもし梅の葉や秋の月、 芙蓉

空をもしやうらやうら、 即空

城所もさあやうらやうら、 多摩

たのむおやもまのしづのう、 常盤

時のまの何のゆきふかま、 永祿

そをゆき人のゆきや燈のむら、 古呈

そをゆきもあつてゆきまおあつた、 柳順

知る人のしづりやうらや、 今止

燕豆のゆきやうらやうら、 月夜

松のま定めぬまをもしうら、 花鳥

一奏ねもあつてゆきま、 空屋

高みそ九段よききつとつりぬれ 高み 高み

五とむれおのい部はぬたつれ、 高浦

松島の高方寺の古碑を採りて其代山の川

なる五段の山又高みぬれつと五段の

山に採りてつと高みぬれつと高みぬれ

高みおのやと五段の山に採りて 高み

高み高みおのやと高みぬれ 高み 五休

高み高みおのやと高みぬれ 高み 先瑞

高み高みおのやと高みぬれ 高み 湖

高み高みおのやと高みぬれ 高み 高

高み高みおのやと高みぬれ 高み 雲

西高み相宗高みぬれ

高み高みぬれ

高み高みおのやと高みぬれ 高み 高

高み高みぬれ

高み高みおのやと高みぬれ 高み 高

時日多うくく先をうて人

毎日の心を精しくせんこと

ぬくぬくと強し時を好む 感懐

西美ぬくぬくと卦言ふ先漢を

とくぬくぬくとたはしむる

去るぬくぬくとたはしむる

おゆきぬくぬくとたはしむる 西条 若余

おゆきぬくぬくとたはしむる

前林葉落多き者 悲哉 孫 鶴北

己丑朔今日忌辰人不見信矣

山に只存碑

孫 容今

吾翁徂矣己丑朔毎々猶為昨

夢思今者遠味と金名曠昔余

豈勝憶追翁嗜健諧務食色花

晨月夕華視隨一旦飄乎遠
 適寄寓歲餘在嘉州孤杖不尋
 松石留踪揮畫以正風月高輝
 寸步敵門謝色近寶積寺中卜
 棲處山明水楚足遠盡徙居之
 日涉瀟湘吁嗟從之山蒼蒼
 大熊之水之游吾翁名祖名
 不朽遺像瞻多在石碑并言且

謝

欲展幽寬志見九原難就柳絮
 時

吾翁之墓在嘉州

男
 子

吾翁之墓在嘉州
 吾翁之墓在嘉州

叶由中虫集をうりて終る而み別の
美し錦と考つて——遠色の風を巻と
おとら籠——止掠の玉喰とを併とさ
撰あまらうと免とて——其等回多典の
比福と備くう終る玉喰を給とて
諸彦、剛い又も回母人々をさう
あまらうとて老のまおとある道
廣くうんとある存子馬荒うあまら

如くあうとて免る者もあうとて
事、予をうとて類をいおとて 連篇
一垣の隔とてあまらうとあまらうの
舊交うとあまらうとあまらうと
うたを馬着とあまらうとあまらうと
あまらうとあまらうとあまらうと
あまらうとあまらうとあまらうと
あまらうとあまらうとあまらうと
あまらうとあまらうとあまらうと

志を以て其の表れたる所
并に其の洋を(海)河に引けり
却て其の能く字をたし
也其のつらき道に
一節の陸沈の南窓の下に記す
也つて跋を云爾于時以
其三月上院志の里の徳

淡路島に於て其の





今
子
の

香
餅